

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしは、じゃんけんでは負けて飼育委員を押し付けられた。生き物は好きで、家にも猫二匹と犬が一匹いるから世話自体はそんなに苦痛ではなかったけれど、これで、お休みがつぶれちゃうかと考えると少しゆううつな気分にはなった。

五年生は二クラスしかなくて、飼育委員は各クラス一名ずつ。

わたしと光くんだった。

1 最初、がっかりした。

落胆なんて言葉を知らなかったけれど、本当に身体の力が抜けるような気がした。

飼育委員で、しかも相手が男の子なんて、最低、最悪だ。動物の世話を真面目にしてくれる男子なんているわけがない、と、わたしは思い込んでいたのだ。

光くんも、じゃんけんかくじ引きで無理やり押し付けられた口だろう。きっと、すごくいいかげんで、無責任で途中で仕事を放棄することだって十分に考えられる。

覚悟しなくちゃ。

3 わたしは覚悟した。

ウサギもニワトリも、世話をしやる者がいなければ死んでしまう。殺すわけにはいかない。自分に預けられた生命を無視できるほど、わたしは凶太くはなかった。優しいわけではない。『わたしのせいで殺してしまった』なんて思いを引きずりたくないのだ。凶太くないうえに、誰かに上手に責任転嫁できるほど器用でもなかったのだ。

不器用で、生真面目で、融通がきかない。

付き合いくらいの人だ、かわいげのない子だと言われていた。でも、しょうがない。これが、わたしだ。

不器用でも、生真面目でも、融通がきかなくても、わたしはわたしを生きるしかない。

わたしは、開き直ったように、でもどこかたくなに十一歳を生きていた。今でもまだ、そういうところはあるけれど、思い込みの強い性質なのだ。

光くんは会って、変わった。

光くんが変えてくれた。

「円藤って、ひょうひょうとしてるね」

ウサギ小屋の掃除をしながら光くんに言われたことがある。ひょうひょうの意味がわからなかった。

フンを掃き集めていた手を止め、わたしは振り向く。光くんがわたしを見上げていた。

目が合った。

柔らかな淡いひとみだ。

光くんと目を合わせたのは、このときが初めてだった。

「ひょうひょうって？」

わたしが尋ねる。光くんが首をかしげる。

「うーん。おおらかってことかなあ。あんまり、ごちゃごちゃこだわらない、みたいな……感じかな」

「そんなことないよ」

大声で否定していた。

自分で自分の声に驚いてしまった。

ウサギのフンの臭いが鼻孔に広がって、咳き込む。

「ほっ、ほっほ」

「円藤だいいょうぶか？」

・ 解答は全て解答用紙に記入しなさい。
・ 字数制限のある問いは、句読点や記号も一字に数えます。

「うん……だいいょうぶ。ちよつと……びっくりしただけ」⁴

「びっくりするようなこと、言ったっけ？」

「言ったよ」

わたしは臭いにむせて、また、咳いていた。

光くんが片手でわたしの背中を叩く。これにも、驚いた。もう五年生だ。男子と女子の距離が何となく開いていく時期だった。距離の取り方をみんな、手探りにしている時期だった。

こんなにあっさり背中を叩いてくれるなんて、叩けるなんて不思議だ。⁵

「何を言ったかなあ」

背中を叩きながら、光くんがつぶやく。妙にのんびりした口調だった。光くんに合わせるように、となりのニワトリ小屋でおんどりのコースケがのんびりと鳴いた。

コケー、コケーツコー。

おかしい。

おかしくてたまらない。

吹き出してしまった。笑いが止まらない。

「えー、今度は笑うわけかあ。どうしたらいいんだろうなあ」

光くんの一言に、わたしはさらに笑いを誘われる。

おかしい、おかしい。ほんと、おかしい。

何て、おもしろい人だろう。

何て、ヘンテコで愉快な人だろう。

知らなかった。

下野原光くんって、こんな人だったんだ。

6 笑いながら、わたしの心は、ほんわりと軽くも温かくなって行く。

心地よかった。

光くんは、飼育委員の仕事をおぼえなかった。いいかげんに済ますことも手を抜くこともしなかった。むしろ、わたしより熱心に取り組んでいた。

夏休みには、ちゃんとした当番表をこしらえて、友だちや先生にも協力してもらって、毎日、登校しなくていいように工夫した。ニワトリ小屋に新しいエサ場や水飲み場も作った(プラスチックのおけとペットボトルを組み合わせた簡単なものだったけれど、とてもりっぱに見えた)。

学校近くの農家を回って、野菜のくずを分けてもらいエサに混ぜたりもした。野菜くずとはいえ新鮮で、ニワトリもウサギもエサ箱に入れたとたん、夢中でついばみ、かぶりついた。

(あさのあつこ『下野原光くんについて』より)

問一 —— 線部1で、「わたし」はどのようなことに「がっかりした」のですか。三十文字程度で答えなさい。

問二 —— 線部2「わたしは思い込んでいたのだ」とありますが、それがただの思い込みだったと分かったのはなぜですか。「光くん」という言葉を用いて、三十文字程度で答えなさい。

問三 —— 線部3で、「わたし」は飼育委員としてどういう「覚悟」をしたと考えられますか。三十文字程度で、解答らんに合うような形で答えなさい。

問四 —— 線部4で、「わたし」はどういうことに「びっくりした」のですか。それを説明したものと最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア いつも人前では感情を表さないほうだと思っていた「わたし」が、光
一くんの言葉に反応して大きな声をあげてしまったこと。

イ 「わたし」が光一くんの言葉に振り向いて、初めて光一くんと目を合
わせた時の彼のひとみが、意外なほどやさしかったこと。

ウ 光一くんが説明してくれた「ひょうひょうとしてる」という言葉の意
味が、「わたし」の想像した内容とかけ離れていたこと。

エ 光一くんが「わたし」について話した内容が、自分自身についていま
まで持っていたイメージと、あまりにも異なっていたこと。

問五 ——線部5で、光一くんのどういふ点が他の同級生たちと違っていて不
思議なのか。それを説明したものとして最も適当なものを、次のア～
エから選び、記号で答えなさい。

ア 同年代の男女は、いつも相手を無視したり遠ざけようとしたりするも
のなのに、光一くんは冷たく突き放すことがない点。

イ 同年代の男女は、適当な接し方がわからずに迷いとまじょうものののに、
光一くんはためらいや遠慮がなく自然に接する点。

ウ 同年代の男女は、相手に好意を持たれようと意図的に近づくものなの
に、光一くんは気に入られようとは思っていない点。

エ 同年代の男女は、相手に思いをさとりられないようにと距離を置くもの
なのに、光一くんは好意をすなおに行動に移せる点。

問六 ——線部6で、なぜ「わたしの心」は「ほんわりと軽くも温かくなって」
いったのですか。それを説明した次の文の□に入る適当な言葉を、
百字以内で答えなさい。

「わたし」は自分のことを不器用で、生真面目で、融通がきかない性格だと
思い込んでいたのに、□から。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「仕事」にあつて「技術」にないものは山ほどあります。(古くからの百姓
仕事の中にあつて、近代的な農業技術の中にはないものはたくさんあります。)
その理由は、技術(近代的農業技術)は、仕事(伝統的な百姓仕事)から取り
出されたのではなく、まったく別のものだからです。

しかし、こういう説明では分かりにくいでしょう。田植機で苗を移植する技
術は、田植えという百姓仕事の発展したものであるかのように考える人の方が
圧倒的に多いからです。手植えにあつて、田植機での移植にないものは何だろ
うか、と考えないから、¹そういう説明で納得してしまうのです。

多くの百姓のおばあさんが、昔の田植えは楽しかったと言います。なぜなら、
田植えをしながら、みんなと話に花が咲いたからです。ごちそうも用意されて
いました。

しかし、田植機での移植には、歌も会話もありませんし、そもそも早乙女が
植える方が稲はよく育つのだという習慣もなくなっています。それは、独りで
もできるように、労働時間を節約するために、ただひたすら生産性を上げるた
めに、そういう精神で手植えにおきかえるために開発された技術だからです。

田植機によって節約された時間はどこで使われたのでしょうか。田植機を買
うための農作業以外の稼ぎに使われました。あるいは農業経営の規模を大き
くするために使われました。つまり、分業に使われました。決して余裕がで
き時間と遊んだりゆつくりするためではありません。その証拠に、田植えのあ
とや稲刈のあとに、年寄りたちが温泉に泊まりがけで何日も出かけていた習慣
はなくなりました。

私は、田植機の出現などの農業の近代化によって良くなったことばかりを、
農政や農学が言い立てることに反感を抱いて、少年時代と青年時代を生きてき

ました。なぜなら、近代化によって失っていく世界の豊かさが身にしみるから
です。だからこそ、²得られたものと失ったものを天秤にかけるぐらゐのことは
しておきたいのです。仕事が新しい近代技術におきかえられていくことによつ
て、何をなくしたのかを考えれば、「仕事と技術のちがひ」も分かるでしょう。
数年前、近所の九十三歳になるお年寄りの百姓夫婦に、³落穂拾いの話を聞いて、
飛び上がるほど驚きました。

落穂拾いという仕事はコンバイン(稲を機械で刈り取ってもみをわらから落
とす機械)の登場でなくなりしました。むしろこの自動收穫機械の登場によつて、
田んぼに落ちるもみや麦粒の数は増えたのですが、なにしろ穂として落ちるよ
りも、粒で落ちるために、拾いにくいのです。穂なら一穂拾えば百粒はついて
いるのですが、一〇〇粒を田んぼの中でワラをかき分けて拾うのは大変です。
何よりも落穂拾いは、それほどの経済的な価値を生み出さないのです。

それでは、かつての落穂拾いは、何のために行われていたのでしょうか。フ
ランスの画家ミレーの『落穂拾い』という有名な絵があります。あの麦の落穂
拾いをしているのは、麦畑を耕作していた百姓ではありません。近所の百姓で
ない貧乏な人たちなのです。キリスト教の精神では、麦は神からの恵みです。
それを独占するのではなく分かち合うという気持ちがよくあらわれていて感動
します。しかし、それはキリスト教の普及した国のことであつて、日本ではそ
ういうことはないだろうと思っていました。

しかし、気になってたずねてみました。

「昔は、落穂拾いはどうしていたのですか。」
すると、すぐに、

「落穂拾いは百姓はしてはいけない、というしきたりだった。」

という答えが返ってきたのです。驚いた私は、
「ええっ、どうしてですか?」

と、さらにたずねました。

「稲刈りがおわりかけるときには、[※]もう畦に袋をもった人たちが待っていて、
私たちが引き上げるとさつと田んぼに入ってきて、拾いはじめていた。」と言
うのです。

現代では落穂であつても、その田んぼの百姓の所有物です。他人が無断で拾
っていたら窃盗になるでしょう。ところが、かつては米は天地の恵みだとい
うのが日本人の農業観でした。前にも述べたように、百姓は決して米を「つくる」
とは言いませんでした。「とれる」「できる」と言った意味が分かるでしょうか。
人間が主役ではなく、百姓は恵みを受け取るのです。したがつて、百姓だけが
独占的に受け取るのではなく、貧しい人と天地の恵みを分かち合っていたので
す。じつにキリスト教の精神と似ているでしょう。⁴日本と西洋と離れていても、
百姓という仕事の共通性に胸が熱くなります。

このように稲刈りという仕事には落穂拾いがくっついていましたが、コンバ
インによる稲の收穫技術にはそれがありません。⁵

農業技術は、百姓仕事にあつたものの多くを捨ててこそ成立しました。そう
いうものにまといつかれたくなかつたのです。田植え歌や落穂拾いのことを考
えていたら、田植えや稲刈りに代わる技術は形成できなかったからです。
それによつて、農業は大きな「進歩」を果たしました。農業もほかの産業と同
じように、生産性という尺度で優劣を比較できるようになっていきました。

昭和三〇年代から四〇年代のはじめまで、朝日新聞社の主催で、当時の農林
水産省の後押しで「米作り日本一」の表彰が行われていました。一〇アールあ
たりの米の收穫量を競つたのです。村の予選を勝ち抜いた百姓は、郡の予選、
県の予選をへて県代表として全国の決戦にのぞみ、日本一米が取れた優勝者が
決まっていたのです。米作り日本一になった百姓の田んぼの畦には、翌年は草
が生えなかつたそうです。見学者が殺到して畦を歩くので、草が伸びなかつた
のです。この時代の多収技術は、まだまだ近代化技術ではありませんでした。
なぜなら、労働時間など無視して、丹精込めて時間を惜しまずに、田んぼの土

れを抱くものなのだと思う。

その一方で私はファンだと自称する人から、「佐藤さんの夕立のような怒り方が大好きです。よくぞいつてくれた、怒って下さった、と胸がスーッとします」というような手紙をよく貰う。

とすると私の大欠点で、多くの敵を作っている「短気」「喧嘩好き」に魅力を感じる人が世間にはいるわけで、それは私にあってその人にはないもののためなのである。「怒りたいのに怒れずブスブスとくすぶって」いない人たち、そうむやみに腹の立つことがない人たち、たしなみのある人たちにとっては、私のような女はどうしても許せぬ下品な女になるのである。

「周りの人を引きつける魅力」とはどのようなものでしょうか、といわれても、優しさであるとか心配りであるとか、快活さ、明るさ、機知、信頼感とか抽象的な言葉は幾つでも出てくるが、ほんとうの魅力というものは機微に属するものなのである。ハウツーで身につけるものではなく、その人のキャラクターと人生経験の多寡によって自然に発酵して身につけていくものであろうと私は思う。

若い女性の間ではよく理想の男性の条件の第一として「優しさ」が挙げられている。優しさとは人の気持ちが変わることであり、人の気持ちが変わるということは、喜怒哀楽のさまざまを経験することによってしか、本当にはわからないものだ。

ある偉いお医者さんが癌になって手術を受けた。その時はじめて、病人のいうにえぬ切ない気持ちが変わった、それまで自分が持っていた患者への優しさは、医師としての職業的な優しさにすぎなかったことがわかった、と述懐しておられるのを読んだことがある。

経験というものはそれほど強い力をもっているものなので、だから経験をうかうかとやり過ぎてしまいう人は、どこまでいってもそれが魅力にまで発酵していかないのである。

人の好き嫌いの殆どは、相性というものだと思っている。相性が悪いということとは感受性が違うという事だ。多くの人に好かれる人は一般向きの感性の持ち主だともいえるのではないだろうか。個性が強い人は人から好かれる率は低いかも知れない。しかしだからといってその個性を殺して、人に好かれるように努力しなければならぬというものでもない私は思っている。好かれるためのとってつけたような努力はわざとらしく感じて疲れる人もいる。

「ありのままでもいいんですよ。あなたの自然でいいんですよ。人生経験を大切にしていれば、自然に魅力がそなわってくるものですよ」と私はいいたい。

5 そんな私はあるいは与えられたこの設問に答えるには、不適当な人間なのかもしれない。

(佐藤愛子『死ぬための生き方』より)

※ 鷹揚——ゆったりとしている様子。

機知——状況に応じて素早く対応できる力。

機微——微妙なおもむき。

多寡——多いか少ないか。

問一——線部1で、筆者がそう考えるのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問二——線部a・bの意味として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- a 気のおけない人
- ア 心を許すことの出来ない人。
- イ 気配りをする必要のない人。
- ウ 心遣いを常にしてくれる人。
- エ 気だてが良く人気のある人。

b 多勢に無勢

- ア 協調性がないため大勢と敵対すること。
- イ 少数派であるのでどうしようもないこと。
- ウ 周りと違う自分を恥ずかしく思うこと。
- エ 多くの人に反発されて孤立していること。

問三——線部2に至る「私」の心の動きを説明した次の文の□①・②に入る適当な言葉を答えなさい。ただし、①は五字以内、②は十字以内で答えること。

周囲の多くの人が高く評価している「しやれ好きの人」を「私」は□①と感じていた。そんな時に「私」と同じ意見を持つ友人に会い、自分のとらえ方が□②と感じて、嬉しくなった。

問四——線部3「己のサービスに溺れる」とは、どのような状態であると考えられるか。それを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア サービスとは本来相手を満足させるためのものだが、自分がサービスをしていることだけに心を奪われている状態。
- イ 冗談の上手な自分が気に入っているので、自分のことを面白くないと思っている人がいることを認めたくない状態。
- ウ 自分のサービスが他の人を喜ばせることに満足して、周りの人からサービスを受け取ることを忘れていく状態。
- エ 自分の冗談が全ての人を満足させていると言われるので、相手を選ばず冗談を言つては自己満足に陥っている状態。

問五——線部4で、「私」に魅力を感じる人とはどのような人だと考えられますか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 他人の考えに同調できない人。
- イ 人に対して寛容で気の長い人。
- ウ 自分の意見を穏やかに論ずる人。
- エ 自己主張が上手にできない人。

問六——線部5とあるが、それはなぜだと考えられますか。それを説明した次の文の□①・②に適当な言葉を入れなさい。ただし①は十字程度で、②は四十字以内で答えること。

多くの人に通用する魅力とはなにか、という設問に対して、人の魅力とは、相性によって変わるものであり、□①ではなく、□②であると筆者は考えているから。

四 次の——線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 彼はリーダーとしてテキニンである。
- ② せっかくの努力がトロウに終わった。
- ③ けがのため県大会への出場をジタイする。
- ④ 苦情に対しセイイをもって対応した。
- ⑤ 青春をサンビした映画を楽しむ。
- ⑥ これまでのカンレイに従う。
- ⑦ アメリカのコクソウ地帯を干ばつがおそった。
- ⑧ いいかげんな仕事ぶりをヒナンされた。
- ⑨ 音楽をきくと心がナゴむ。
- ⑩ 良い作品だったので入選作にオす。

